堆積学研究会報　X

1975.11.30

目　次

●第9回国際堆積学会議（ニース）報告 …… 岡田　博有・飯島　東・西島　進
西脇　二一・志岐　常正
●炭酸塩コンクリーションの成因について――炭素同位体組成を中心として …… 平林　憲次
●泥質岩の鉱物組成の解析 …… 鹿野　和彦
●堆積学研究会第3回例会記事
●堆積学研究会第4回例会記事
●論文紹介　・Chemical Geology・Marine Geology
・Sedimentary Geology・Sedimentary Petrology
・Sedimentology
●ニュース　・生命の起原および進化学会第2回学会大会
・続成作用における有機物の変化に関するシンポジウム
・第5回有機地球化学談話会
・1976年度ゼオライト国際会議
・CPNS国際会議

第9回国際堆積学会議（ニース）報告

岡田　博有（鹿児島大学教養部）　飯島　東（東京大学理学部）
西島　進（石油開発公団）　西脇　二一（京都大学理学部）
志岐　常正（京都大学理学部）

去る7月の初めフランスのニースで第9回国際堆積学会議が開催された。日本から私たち5名が出席の機会に恵まれたので，ここに会議の模様を簡単に報告する次第である。

1. 会期と会議組織

1975年7月6日より7月12日まで本会議が持たれ，その前後フランス内外で約22方面の野外巡検が組織された。

この会議は国際堆積学協会（IAS）とフランス堆積学協会が共催し，大会の組織委員長はニース大学のProf. J. Ph. Manginが務めた。また会議のための全業務は旅行社“Kuoni”が代行した。

堆積学会議は後で述べるように大変盛会であったが，会議準備段階の論文提出時期にフランス国内では長期郵便ストが重なったため，会議組織関係者の心労のほどは大変なものであったと思われる。

2. 会　場

本会議はニースの中心に偉容を誇る市営カジノ“Palais de la Méditerranée”で全日程が行なわれた。この建物は，よくぞ名ずけられた地中海の“紺碧海岸”（côte d'azur）に面し，時はまさにビキニの美女たちに埋めつくされた円礫ビーチを見下す最高の位置を占めている。

ロマネスク風の重厚な上記建物は3階建で，階

下はカジノに使われており，2～3階の3室が会議に用いられた。ただ，会議向きの部屋は400人位収容できる小講堂のみで，他の2室は折り畳み椅子などを寄せ集めた急ごしらえの会場であった。このため音響効果，照明，座席の座り心地など必ずしも良好とはいえなかった。

各会場はスライド映写関係の設備がまた悪く，不興を買っていたようである。ただ，どの会場でも英ー仏語相互の同時通訳がサービスされていた。しかし，大会受付けのサービス係はフランス語しか話さない人が多かった。また，各会場場内の模様はテレビ中継されて受付ロビーに送られていた。

このほか，ロビーにはヨーロッパの出版社数社が会期中出版物の展示をして，出席者の関心を集めていた。

3. 宿　　舎

出席者の宿舎はすべて会場から徒歩20分以内のところに，約29ホテルが確保されていた。この地は一流の国際的リゾートで，しかもシーズン中とあって並みのホテル（級別星印の数は2～3）でもかなり高値だったのは仕方のないことであろう。2っ星クラスでバス・トイレ付，朝食付で6,000円前後であった。ただ，相部屋にすると3つ星クラスでも税込約4,600円と，かなり安く上がる。なお，ホテルは，海岸通りに沿って高級ホテルが並び，山の手に行くほど安くなる。

4. 会　　議

会議出席者は事務局の推定によれば総勢900名にも及び，発表された論文総数は約370編にも達した。

本会議は先ず7月6日夜，開会式を以て幕を挙げた。この式では国際堆積学協会会長ギュブラー女史と大会組織委員長マンジャン教授，ニース市長を中心に，フランス堆積学界の長老であるA. Vatan と A.Lombard の両教授をお迎えして盛大に挙行された。しかし記念学術講演のようなものはなかった。

翌7月7日から，途中1日おいて，最終日の7月12日まで，連日朝8時半から夕方6時過ぎにかけて，A，B，Cの3分科会場に分かれて熱心な講演と討論が行なわれた。

講演テーマは次のように区分された。（　）内の数字は講演日程と会場を，〔　〕はコンビーナを示す。

1. Sedimentological factors〔Dr.P.F.Burollet〕　49編
   - 1a. Cold climates（7A）
   - 1b. Carbonates of platforms, paleoclimates & paleolatitudes（7A）
   - 1c. Cratonic paleogeography（7A）
   - 1d. Geochemistry（7A）
   - 1e. Arid & humid climates winds（8A）
   - 1f. Indicators for paleoclimates & orogenic phases（8A）
2. Geochemical Aspects of Continental sedimentation〔Prof. Goffis & Prof. G.Friedman〕　32編
   - 2a. Euxinic Environments ——actual models（8B）
   - 2b. Trace elements（8B）
   - 2c. Red beds（10A）
   - 2d. Geochemistry in continental basins（10A）
   - 2e. Hard grounds, pedogenesis（11B）
   - 2f. Actual Lacustrine sediments（11C）
   - 2g. Concretions & organic structures（12B）
   - 2h. Thermoluminescence（11B）
3. Progress in sedimentological technics and methods〔Dr.R.Bonnefille & Prof.D.F.Merriam〕　20編
   - 3a. Mathematics and sedimentological technics（7C）
4. Tectonics and sedimentation〔Prof. M.Lemoine & R.H.Dott, Jr〕　49編
   - 4a. Synsedimentary faulting and sedimentation（10C）
   - 4b. Wrench faulting and sedimentation（10C）
   - 4c. Flysch and molasse（11C）
   - 4d. Chaotic sedimentation and tectonics（11C）
   - 4e. Sedimentary breaks（12B）
   - 4f. Tectonics and continental mar-

gin sedimentations (12C)

5. Synthesis of sedimentary basins [Prof. Y. Gubler & Prof. E. Mutti] 82編

5a. Pleistocence and Miocene basins (10C)

5b. Cretaceous and paleogene basins (11A)

5c. Jurassic basins (11A)

5d. Permo-Triassic basins (11A)

5e. Paleozoic and proterozoic basins (12C)

5f. Platform and mobil basins (12C)

5g. Deltas (11A)

5h. Regional synthesis (12C)

6. Sedimentary mechanics—Rates of sedimentary processes [Dr. E. Winnock & Prof. G.V. Middlefon] 41編

6a. Dynamic control of basins (10B)

6b. Changes in strata morphology (11B)

6c. Granulometry and sedimentary mechanisms (11B)

7. Diagenesis [Prof. H. Füchtbauer & Dr. B. Tissot] 39編

7a. Evaporitic diagenesis (8C)

7b. Diagenesis in clastic sediments (8C)

7c. Carbonate diagenesis (8C)

7d. Special minerals and probiems (10A)

7e. Comparative scales in diagenesis (10A)

8. Great Depths: recent sediments [Prof. L. Dangeard] 15編

8a. Diagenesis, deep lithification (7B)

8b. Lysocline, deep sedimentation (7B)

8c. Far oceans (7B)

8d. D.S.D.P. (7B)

8e. Deep sea markers (8A)

8f. Biological markers for depth and temperature (8A)

9. Economic geology [Dr. slansky & Prof. G.C. Amstutz] 21編

9a. Phosphates (12A)

9b. Metallic deposits (12A)

9c. Others (12A)

9d. Principles (12A)

10. Open topics [Prof. P. Cotillon] 23編

10a. Regional sedimentology (12B)

10b. Pollution and environmets (12B)

これらのうち，炭酸塩堆積物に関する論文は質量ともに他を圧していた。この分野の研究の繁栄は過去10数年来の国際的傾向であり，前回第8回会議（ハイデルベルグ）のときはまさにピークであった（飯島，1972），今回の会議を特徴づけたのは何といってもDSDPの成果を中心とする海洋堆積学からの話題であろう。本会期の前半の話題をさらっていった感があった。とくに大洋底のフィルム映写は注目を集めた。また，数理処理に関する分科会も着実な発展をとげているようすがよくうかがえた。

ところで，われわれ出席者のうち，飯島はテーマ2で「日本の古第三紀挾炭層中の炭酸塩類の地球化学」（松本　良と共著）およびテーマ7で「沸石続成作用における間隙水中のNa濃集効果」と題し講演するとともに，テーマ7の分科会で，会議締めくくりのコメントをする“Rapporteur”の役を果した。西脇はテーマ6で「和泉層群の層厚解折」について発表した。志岐と岡田はテーマ4に所属し，志岐は「日本列島地史における堆積作用，とくにタービダイトについて」（徳橋秀一・井本伸夫と共著）と題して講演し，岡田は「正地向斜帯における上方粗粒化堆積とその構造的意義」（松本達郎と共著）について発表するとともに，テーマ4の“chaotic sedimentation”の分科会を主宰した。このほか，外国研究者との共同研究として，小西健二氏，加賀美英雄氏の名前があった。

講演はいずれも討論を含めて15分という短時間に制限され，どの会場でも時間が不足気味のようだった。

また，各会場を通じ非常に不便であるとともに

不満だったのは組織だったプログラムがなく，場当たり的だったことである。また，各分科会での発表論文構成にはテーマになじまないものがあるなど，問題があった。こういうわけで，何かにつけて組織だったハイデルベルグ会議と比較される羽目になった。

総会は9日夕方7時頃から開かれ，いくつかの重要案件が採択された。その1は規約の改正での，執行部強化のための原案に激論が戦わされたが，Bureau強化による事務局業務円滑化をうたった改正案が採択された。その2は第10回会議開催地の決定である。事務局としては当初東欧圏諸国に開催地の引受けを打診していたが失敗し，主催立候補国はイスラエルのみであったため，イスラエルにするかどうかの討論，採決が行なわれた。これには中東情勢にからむ不安や反対意見が強い調子で出されたが，最終的には採決によってイスラエルに決まった。なお，開催時期は万国地質学会議との兼ね合いから次回だけ3年後（1978）に開かれることになった。イスラエル地質調査所が中心になって組織される予定である。また，この後の評議員会で次回は1978年7月第2週に行うことが了承された。第3の重要事項は役員改選である。新会長には今年までSociety of Economic Paleontologists and Mineralogistsの会長を務めたアメリカのProf. Gerald M. Friedmanが選出された。また日本から岡田が新評議員に選ばれ，飯島はNational Correspondentに指名された。ともかく，この総会では論議も白熱し，延々深夜に及んだのであった。

最終日の12日は，夕方6時半から閉会式が催された。これにはフランス堆積学界の大御所Prof A. Lombardによる会議全体を回顧しての論評があり，次回主催国イスラエルの代表Dr. Nathanに対する拍手で幕を閉じた。

5. 出版物

今回の会議では，英・仏両国語による要旨集（180p.）のほか，テーマ1から10まで，テーマ毎に分冊になった論文集が発行された：
I－248p.，II－176p.，III－130p.，IV－340.,p
V－399p.，VI－239p.，VII－237p.，VIII－83.,p
IX－118p.，X－150p.，総ページ数2,120p.という膨大なものである。関心のある方はわれわれ出席者のうち誰にでも連絡をとってくだされば利用いただける。

討論などを収めたポストプリントはこれから用意される予定である。このほかこの会議に提出された論文を別の形にまとめて出版する計画はないようである。

以上会議に関係した話題のほか，野外巡検はいずれのコースも充実したものであった。われわれは各自の興味により互いに異なるコースに参加したので，いずれ機会をあらためてその模様を紹介することもできよう。

最後にこの会議のホストProf. Manginのご労苦に心から感謝するものである。また，私たちの会議出席にあたり種々ご便宜をいただいた関係各位に厚くお礼申しあげる。とくに，岡田は文部省の国際研究集会派遣により参加したことを明記して当局に深く謝意を表する。

引用資料

飯島　東（1972）：第8回国際堆積学会に出席して，堆積学研究会報，(6)，1－4.